

日本語教育実践研究 (10)

－自律学習を促進する文章表現教育－

宮崎 里司

実践研究(10)が行われる、文章表現8Cは、大学や大学院などのアカデミック場面で必要とされる文章表現能力の向上を目指しています。授業では、文章産出の過程で出てくる様々な問題に対して、その原因を明確化し、意識化を繰り返すことで、問題解決能力を育成していく活動を行っています。その上で、意見文、説明文、論説文などを通して、構成や表現などを確認した上で、各自の研究テーマや目的に合わせて、レポートや研究計画書が書ける能力を身に付けることを目標とします。またクラスに参加している大学院生とのペアやグループを形成しながら、共同作業を通して、自分の文章表現能力を向上させ、問題解決能力を育成していきます。

このクラスでは、授業の方法と特徴として、「文章を作成するための2つのモニター」に注目しています。文章を作成する際には、自分自身の文章作成の過程を意識化し、それを客観的に評価するといった「自己モニター」の利用が重要となります。授業では、まず、構想の段階で自分が扱いたいトピックやテーマについて、クラスメイトや日本人参加者と話し合い、書く内容を検討します。そして、見直しの段階でも他者とのセッションなどによって客観的に自己の文章を再検討します。この内容に関わる検討を第一のモニターとします。また、自分自身が実際に文章を作成する過程で生じた問題についても意識化を行い、文章を検討していきます。これが第二のモニターです。このように、この授業では2つの違った性質のモニタリングを行い、他者の評価や意見、自分自身の文章表現能力と向き合い、今以上に能力を高めていくことを目指します。さらに、ジャーナルアプローチ(言語学習日記)といった活動もしています。これは、学習者の自律性を高めるために、学習者自身が、自らの学習を意識化させる活動です。毎回授業の終わりに各自が揃えたノートに、その日の授業の感想をはじめ、自分の日本語学習に対する意識、学習方法、問題点、日本や日本語に関する興味、質問事項など何でも自由に書きます。そして、クラスに参加している日研生から、感じたことなどをコメントしてもらい、次の週に渡します。言語学習日記は、学習者が自己反省・自己評価を行うことによって自分自身をみつめ、学習の改善をはかる手助けになるばかりでなく、個々に自律学習への意識づけをし、学習者の学習態度や意欲の向上にもつながります。学習活動の工夫や学習者の要望への対応など、学習者側に視点を置いた授業への構えを教師に意識づけることにもなるからです。

こうした具体的で、自律的な学習プログラムをデザインし、接触場面でのインターアクション能力の向上を目指しています。

(ミヤザキ サトシ・日本語教育研究科教授)